集団の一員として、よりよい生活を創る学級・授業づくり
―家庭科における言語活動を取り入れた調理学習（小学校）―

教育実践研究科　教育実践専攻　教職実践基礎領域
佐々木　絵理

Ⅰ　はじめに

１．今、求められている資質・能力

これからの時代は生産年齢人口の減少、グローバル化の進展や絶え間のない技術革新等により、社会や職業の在り方そのものが大きく変化する可能性がある。その時代を乗り越えるために「『自立』した人間として、他者と『協働』しながら『創造』的に生きていくために必要な資質・能力」が必要とされている（『第２期教育振興基本計画』2013）。

２．確かな学力を育てるための「習得」「活用」

学習指導要領の改訂での重要なポイントが「習得」「活用」(探究)を重視した課題解決能力の指導である。

「確かな学力を育成するためには、基礎的・基本的な知識及び技能を習得し、これらを活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力その他の能力をはぐくむことの双方が重要であり、これらのバランスの重視する必要性がある」と指摘されている。次期学習指導要領の骨格となる「21 世紀型能力(試案)」でも「習得」と「活用」の段階を重視した指導をしていくことが必要であるとされている（注 1)。

Ⅱ　家庭科に求められること

１．「自立・協働・創造」的な能力と家庭科授業

いわゆる「自立・協働・創造」の力は、各教科においてこれらを踏まえた授業を行い、育成していく必要がある。家庭科において「自立・協働・創造」を学習指導要領に沿って私は次のように捉え、「生活の自立を図り、多様な人々と共生しながら持続可能な社会を目指し、家族や地域の生活を創造すること」をよりよい生活とすることとした(概略)。

自立…衣食住生活、消費生活等、生活の自立を図ること
協働…男女が協力しながら、高齢者や幼児等多様な人と共生し、持続可能な社会を目指すこと
創造…家族や地域の生活を創造する能力と主体的に実践する態度を育てること

２．小中高での系統性のある指導

学習指導要領の改訂により家庭科は小・中の系統性・連続性が重視された。例えば小学校では８内容、中学では２内容で構成されていたが、共に４内容に変更されたり、中学校で学習する「五大栄養素」の基礎を小学校で扱うことになったりしている。これらは高等学校の家庭科の目標である「主体的に家庭や地域の生活を創造する能力と実践的な態度」を「発達段階に応じて段階的」に身に付けさせることにつながっており、小中高を見通した系統的な指導をする必要があると考える。そのために小学校では自分のことが自分でできるようになったり、物を作りだしたりする喜びを味わわせ、さらに家庭の問題に目を向け、解決し、家庭生活をよりよくしようとする態度を育てていくことが求められている。

３．学びを生活に生かす言語活動(言語力・表現力)

平成 20 年１月、中央教育審議会の答申によって「言語活動の充実」が重視された。言語は論理や思考等知的活動の基盤であり、コミュニケ―ションや感性・情緒の基盤でもある。各教科では、思考力・表現力・判断力等を育成するために、観察・実験、レポート、論述等、言語活動を取り組む必要があるとされた。

小学校家庭科では「衣食住などの生活の中の様々な言葉を実感を伴って理解する学習活動や、生活の課題を解決するために、言葉や図表などを用いて生活をよりよくする方法を考えたり説明したりする学習活動を充実すること」と学習指導要領に記された。

つまり被服製作や調理実習等、体験活動を目的とするのではなく、その過程で学んだことや感じたことを言葉に表しまとめることにより体験と言葉を結びつけ、生活への感性を高めたり、生活を見つめ課題をもち、思考、判断し解決したりすることを通して主体的な課題解決の力を身に付けさせる必要がある。

Ⅲ　実習校の学びの実態

１．学校の特徴

連携協力校のＡ小学校は、全校児童776名、学級数27の大規模校である。創立してから100年以上経った伝統ある学校で、教育に熱心なご家庭が多い。

２．児童の実態

教師力向上実習Ⅰ・Ⅱは５年生の学級で実習をさせていただいた。本学級は男子18名、女子18名の計36名で構成されている。明るく素直で、男女の仲もよく互いに助け合いながら生活することができている。学習態度がよく、どの授業でも意欲的に学習に取り組む。

Ⅳ　研究にあたって

時代の急速な変化は私達の暮らしを豊かにし、多くの恩恵をもたらしたが、一方で向き合わなければいけない課題もある。その一つに「人と人とのつながりの希薄さ」があると考える。様々な人間関係のトラブルやコミュニケーションのズレによる事件等のことを考え合わせると「人間的な温かな、深い関わりやコミュニケーション」をどう考え、克服していくかという課題と私達は向き合い、解決しなければいけない。

私達は、誰もが様々な集団に属し生活している。その集団の中では互いを認め合い協力し合い、全ての人が集団をよりよくしようという意識と実践力が必要である。だが「誰かが何とかしてくれるから…」「自分がよければ…」と他人まかせにして自分は何もしようとしない人がいるように見受けられる。この21世紀を生き抜くためには社会という大きな集団を構成する私達一人ひとりが自立し、他者と協働しながら、よりよい生活を創造する必要がある。

そこで、教師力向上実習の全体のテーマを「集団の一員として、よりよい生活を創る学級・授業づくり」と設定した。小学生にとって身近な集団は学級と家庭である。それらの集団の中で自分の役割を自覚し、集団の一員としての責任を果たすことで、仲間と協力して集団のために活動する楽しさや生活を創りだす喜びを味わわせたい。

Ⅴ　学級づくり実践　教師力向上実習Ⅰ

『　学級の一員として、自己有用感を育むための学級経営－聞くことを意識した小グループ学習によって－　』

１．主題設定の理由

実習期間の５月半ばから６月初旬は新しい学級に慣れ始め、人間関係が少しずつ構築されていく時期である。本実践では誰もが認められる、温かな人間関係の中で生活することで「自分は他者や集団にとって価値ある存在なのだ」という自己有用感を育てたいと考えた。自己有用感が高い児童は他者に対して思いやりのある行動ができたり、自主的・自律的な生活ができたりするとされている。学級の一員として、自分の存在を他者から認められながら、主体的に学級に役立つための行動をしようという意欲を育てたいと考えた。

２．自己有用感について

自己有用感とは「他者や集団との関係の中で、自分の存在を価値あるものとして、自分自身を受け止めようとする感覚である」とされている。自己有用感は良好な人間関係（「関係性」）のもとで他者や集団に「貢献」し、「承認」されることで、他者や集団における「存在感」が高まるとされている（注２）。

３．児童の自己有用感に関する実態

自己有用感に関するアンケートをとったところ、次のような結果になった。

【資料１】　学級全体の自己有用感の実態（表）

因子	質問項目	肯定的回答	
存在感	わたしは，クラスの人の役に立っていると思う	33.3%	33.9%
	わたしは、クラスにとって必要だと思う	36.1%	
	わたしは，クラスの人から頼りにされていると思う	32.4%	
貢献	わたしは，クラスの人の手伝いをすることがある	69.4%	56.9%
	わたしは，クラスの人が「すごいなあ」と思う意見を言うことができる	44.4%	
承認	わたしは，クラスの人から「ありがとう」と言われることがある	61.1%	48.6%
	わたしは，クラスの人からほめられることがある	36.1%	
関係性	わたしは，クラスの人を頼りにしている	75.0%	78.7%
	わたしは，クラスの人と一緒にいると心がほっとする	83.3%	
	わたしは，クラスの人に助けてもらっていると思う	77.8%	

この結果から本学級の児童は良好な人間関係を築けていると感じている児童が多いと言うことができる。しかし自分はクラスにとって必要である、役に立っている等、存在感に関する認識は低い。また、仲間から褒められる機会が少ないことも分かる。

４．実習計画

道徳、学級活動、家庭科の授業を通して４人の小グループで学習するようにした。このグループ活動では仲間の意見や考えを受容的に「聞くこと」を意識させながら、自分の意見を述べたり仲間を認めたりするようにさせた。この活動を通して、グループの一員とし

ての自己有用感を高めることをねらいとした。

また、常時活動としてスピーチ活動を行った。この活動でも話し手が安心して話すことができる受容的な聞き方を意識してスピーチを聞くようにさせ、習慣づけられるようにした。

【資料２】実習計画（構想）

主な学習内容	
1 **「相手が喜ぶ聞き方を身につけよう」**（学活） ・話をしているときに嬉しくなる聞き方と不安になる聞き方を体験させ、嬉しい聞き方（「聞く力」の基礎、話し手の顔を見る、笑顔で、うなずく等）を意識しながらテーマに沿った会話をさせた。 2 **「ナイス・シュート」**（道徳） ・読み物資料「ナイス・シュート」を通して、仲間と協力する大切さを考え、グループで意見を交流した。 3 **「おもちゃのシンフォニー」**（道徳） ・読み物資料「おもちゃのシンフォニー」を通して、集団の一人として役割を果たす意味を考えグループで意見を交流した。 4 **「無人島で遭難」**（学活） ・無人島に遭難した時、生き残るために必要な道具を10個の中から３つ理由を明らかにして選んだ。次に、グループで３つ道具を選び、順位をつけた。 5 **「ゆで卵の調理計画を立てよう」**（家庭科） ・ゆで卵の調理の手順や失敗しないためのこつを知った。次に、グループで調理実習の役割、使う調味料、グループ名を話し合って決めた。 6 **「こだわシュランを開こう」**（家庭科） ・調理実習で作ったこだわりのゆで卵についての紹介文を書き、グループで紹介した。そして仲間のこだわりのよさを見つけ、伝えた。	1 仲間を受容する聞き方を身に付ける 2 3 協力することや役割を果たす大切さを考え、自分の考えをグループの仲間と伝え合う 4 5 理由づけた考えをグループの仲間と伝え合い、建設的な案を 6 論理的な構成の紹介文でゆで卵づくりの実践を伝える仲間の個性を受け止め、よさを見つけ、伝え合う ↓ **自己有用感の育成**

５．実践の内容（資料２・３参照）

（１）6 こだわシュランを開こう

調理実習でつくったこだわりのゆで卵についての報告会（こだわシュラン）を開いた。その際に、はじめ・なか・まとめ・むすびで構成された論理的な紹介文を書き、仲間に伝えるようにさせた。そして、グループ全員からこだわりのよさをほめられるようにし、誰もが平等に仲間から認められるように工夫した。

【資料３】こだわりのゆで卵と紹介文

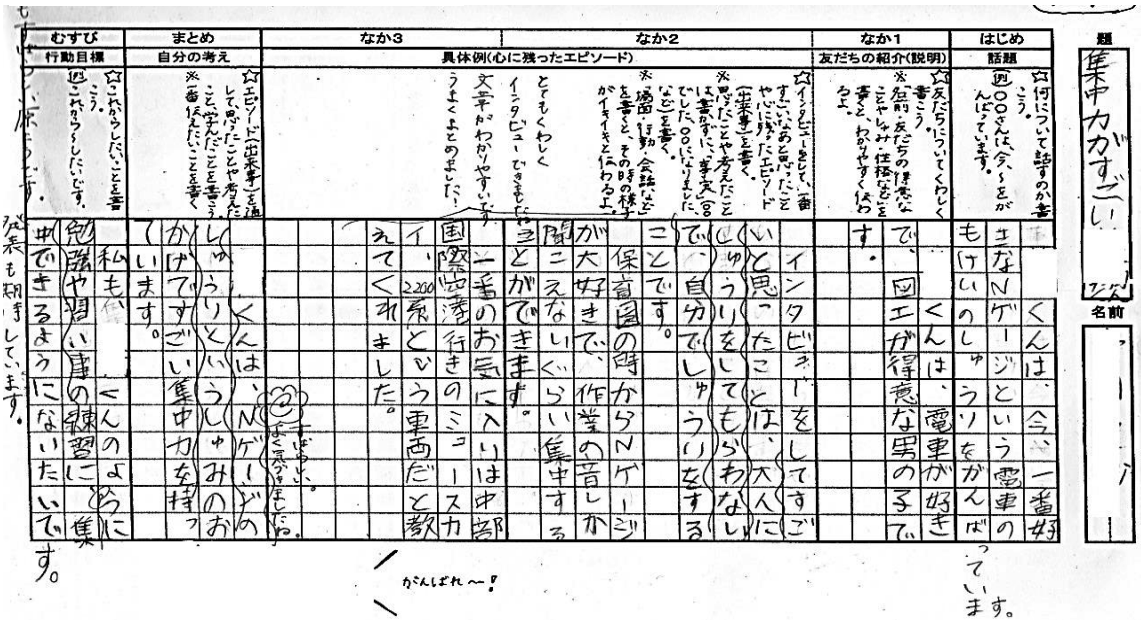
こだわシュランを開こう　とっておきのゆで卵づくり、紹介します

構成	内容	書き方のポイント	説明
はじめ	ゆで卵の紹介	①自分のこだわりのゆで卵の料理名を紹介しよう	(ぼく・わたし)は、 ①エッグ・ザ・クロック を作りました。
		②一番こだわったことを書こう ③こだわった理由を書こう。	(ぼく・わたし)のこだわりポイントは、 ②ゆでじかん です。なぜ、こだわったかというと ③3分だとドロドロすぎてエッグ・ザ・クロックにならないからです。
なか	調理実習で学んだこと	④⑤調理実習で学んだことを２つ書こう。	(ぼく・わたし)が調理実習で学んだことは２つあります。１つめは、 ④ゆでたまごの作りかたと、失敗しにくい方法が分かった ということです。２つめは、 ⑤切り方には、たくさんのくふうする方法があった ということです。
まとめ	調理実習の感想	⑥調理実習の感想を一言で書こう (例)・楽しかったこと ・難しかったこと	(ぼく・わたし)が調理実習で ⑥気持よかった ことは、
		⑦一言の感想を具体的に書こう。 (例)・ゆでたまごを細かく切ること	⑦ゆでたまごのからをむく時、つるっとむけた事 です。
むすび	行動目標	⑧これからしたいことを書こう。 (例)・家で… ・次の調理実習では、…	(ぼく・わたし)は、 ⑧家で、ふわふわでおいしいたまごやきを作ってみ たいです。

（２）スピーチ活動（常時活動）

帰りの会に「友だちが頑張っていること」をテーマにスピーチ活動を行った。隣の席の人に「今、頑張っていること」についてインタビューをして、はじめ・なか・まとめ・むすびの論理的な構成でスピーチ原稿を書き発表させた。書き方の型と見本、アドバイスを示すことによってどの児童も原稿が書けるように工夫した。

【資料４】スピーチ活動の原稿



また、原稿には朱書きを入れ、文章の分かりやすさや詳しさだけでなくその児童らしさや友だちについてのよい見方や捉え方等をほめるようにし、友だちだけでなく教師からも認められていると感じられるようにした。

６．考察ー児童の授業日記よりー

(1) 1「相手が喜ぶ聞き方を身に付けよう」(学級活動)

①みんながいい聞き方をしてくれてうれしかった
②うれしい聞き方をすると友達が笑顔になると思った
③話すには人と人とのコミュニケーションが大切だなと思いました

話をしていて安心できる聞き方と不安になる聞き方の両方を児童全員が体験したため、嬉しい聞き方(相手を意識した受容的な聞き方)のよさを感じながら授業に参加していた。また、話すテーマが「ペットにするなら犬？猫？」等児童にとって身近で話しやすいものだったので、学力や人間関係に関わらずどのグループでも楽しみながら活動していた。しかし、話が盛り上がりすぎて肝心の聞き方を意識していない児童がおり、身に付けさせ方について課題が残った。

(2) 3「おもちゃのシンフォニー」(道徳)

①ぼくも前そんなことがあってやりたかったクラブをがまんしてちがうクラブに入りました。始めはいやだったけど、いまはすごく楽しいです。ゆずってよかったなーと思いました
②悲しいことがあるけれど、ゆうたくんみたいにがんばらないとと思った

音楽会でやりたくない楽器を担うことになった小学生の話で児童にとって親しみやすく道徳的価値である役割や責任について考えやすい資料だった。だが、授業自体が形式的になってしまい、やや深まりのない授業となってしまった。教材研究と発問の工夫が必要である。また中心発問だけでなく授業の感想をグループで語り合えば、それぞれの経験を知って再度、集団の中で役割を果たす意義について自分の考えを整理できたと考える。

(3) 5「ゆで卵の調理実習の計画立てよう」(家庭科)

①ぼくは塩を選んだけどみんながケチャップと言ってて、ケチャップはかけて食べたことがないから選んでみた
②味のことや固さや役わりの話し合いが楽しかった
③調味料を塩ではなく、焼き肉のたれにしたかった、焼き肉のたれは人気がないことがわかった

グループでゆで卵作りの調理実習のレストラン名、調味料、役割分担を決めた。この時に多数決にするのでなく建設的な案を目指した。だが、この活動ではうまく話し合えたグループとそうでないグループがあった。うまくいかない原因として話し合いにおいて学力が高い児童の意見に他の児童もつられてしまったり、力のある児童の意見がグループの意見になったりすることがある。みんなが納得できるよう「新しい考え」をつくったり、満足いかなければそれを伝えて改善策を出したりする等、建設的な話し合いの方法の視点を与えるべきだった。

(4) 6こだわシュランを開こう(家庭科)

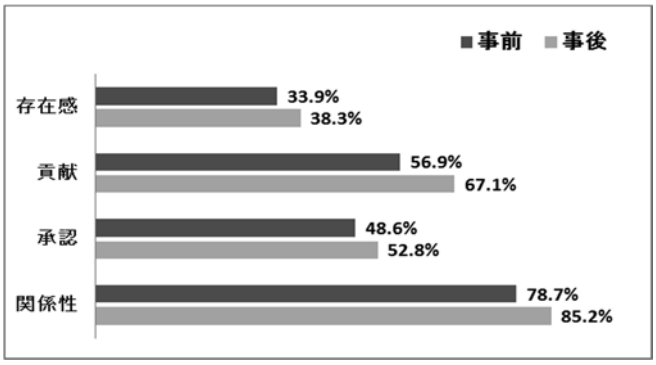
①みんながみんなをほめることができて、ほめられたりほめてあげたりしてとても楽しかった
②人に自分の作った料理を見せるのははずかしいけれど、「～がいいから」といわれるのがよかった
③○○さんの「ひよこ」という題名のゆで卵は、本当にひよこがいるみたいでかわいかった

自分の料理を紹介する際に発表原稿の型、仲間と発表し合う際に話型を示していたので、どの児童も話すことでつまずくことはなかった。また、児童が作ったゆで卵には切り方・盛り付け方・調味料・料理名等、児童の個性があふれており、ゆで卵を認め合うことが仲間を認め合うことに繋がった。なかには調理実習で計画通りにいかなかった児童もいたが、グループの仲間に様々な視点でほめられたり学級全体の場で紹介してもらったりして、嬉しそうにしている姿もあった。

７．成果(詳細は誌面の関係上、省略する。)

学級全体の実践前後の自己有用感に関するアンケート結果を資料５に示した。

【資料５】　実践前後の自己有用感の変容(グラフ)



グラフから実践により学級全体の自己有用感が高まったといえる。特に「貢献」で大きな変化があった。

事前アンケートで自己有用感が極端に低かった児童Ａは事後アンケートで「貢献」と「承認」の自己評価が高まった。彼女は発表することをあまり得意としておらず不安な表情を見せることが多かった。スピーチ活動の日も「今日はスピーチをする日だから緊張する」とつぶやいていたが、堂々とスピーチをして彼女らしい微笑ましい内容に温かな笑いが起こった時もあった。スピーチ後には「ちゃんと言えたし、～の部分でみんなも笑ってくれた!」と笑顔で私に報告しにきた。

児童Ａに限らず、自分の意見や考えを仲間に伝えることに苦手意識をもっていたり、伝えたくても認められるか不安で発表できなかったりする児童は多い。そういった児童にとって安心して話せる少人数グループという本実践での学習形態は効果的であった。そして話したくなるようなことがあることも重要である。児童にとって親しみやすいテーマや話し合い方にしたり話型を示したりしてどの児童も話し合いやスピーチ活動に参加できるように工夫した。その結果、児童がグループでの話し合いに貢献できている、仲間から認められているということを感じることに繋がったと考えることができる。

８．課題－全ての児童の自己有用感を高めるために－

学級全体を見ると自己有用感が高まったように見えるが逆に低くなった児童もいる。児童Ｂは「貢献」「認証」「関係性」が低くなった。Ｂの自己有用感が下がった原因は２つあると考えることができる。１つめは彼が話すことを苦手としているため、仲間にうまく伝えることができなかったことである。２つめは同じグループの児童の受容的な聞き方が表面的になってしまっていたことである。実際に授業後にＢが不満そうな顔で「自分の意見を全然聞いてもらえなかった」と言っていた。笑顔で聞く、相槌を打つ等、態度面だけではなくさらになぜ相手がそのような発言をしているか言葉では表出していない思いや背景を想像するという高次の聞く力を育てる必要がある。

本実践は受容的に聞くことを意識して６回のグループ活動とスピーチ活動を行った。仲間が受容して聞いてくれれば安心して話すことができる。だが、受容的に聞く力は態度だけでなく、他者への想像力と聞く観点、評価方法の指導が大切である。さらに、話す力を身に付けさせることも重要である。話すときの態度、論理性、理由や根拠等を挙げながら話す力を段階的に習得させなければ、自分の伝えたいことが伝わらず、円滑な話し合いにならない。国語科のみならず、さまざまな教科や時間で系統的・横断的に聞く力、話す力を育てる必要がある。

Ⅵ　授業づくり実践　教師力向上実習Ⅱ

『　家族の一員として、家庭生活に関わる喜びを育てる家庭科授業の開発－家族のための調理学習を通して－　』

１．主題設定の理由

これまでに児童はこだわりのゆで卵づくりや小物の製作を行ってきた。調理や裁縫を初めて体験する児童が多くいたが、自分なりに工夫して料理や小物を作り、その楽しさを感じている姿が見られた。

だが、家庭生活は自分一人だけが満足するのではなく、家族全員がより満足できるような場である必要がある。そこで本実践では家族のための食事づくりをすることにした。これまでの「自分のため」に生活を創ることから、「家族のため」という視点を取り入れることで、児童に家庭生活に関わる楽しさ、喜び、難しさ等を味わわせたいと考えた。そして、その経験がまたやってみたいな、もっと工夫してみたいなという家庭生活をよりよくしようとする意欲をもたらすのではないか。

２．実践方法と観点

（１）楽しく学べる単元計画の工夫

授業での学びを家庭に生かすことを単元のゴールに定め、児童が家で調理をしてみたいと思えるようなストーリー性のある単元構成になるように工夫した。

また、学びの到達目標の明確化、習得・活用の段階を設定することにより、ゴールに向かって一つひとつの授業で児童に身に付けるべきことを明らかにした。

（２）感じたこと、学んだことを表現すること

体験活動を取り入れ、わかったことや感じたことを言葉で表現することを大切にする。例えば、「だし」について学習する際は、だしの入ったみそ汁とだしの入っていないみそ汁を試飲し、「まるで～のよう」とたとえをつかって児童それぞれの言葉で概念化(言語化と評価・判断力)し、実感を伴った理解ができるようにした。このように児童が家庭生活に関わる言葉を自分なりに整理し、表現したり、知識として吸収したりすることで、生活への感性や関心・想像力(創造力)を高めさせられると考えた。

（３）家庭との連携

家庭との連携を図り、家族とのかかわりを深めさせられるよう心掛けた。例えば、みそ汁づくりの工夫について家族にインタビューすることで、おいしく作るための工夫だけでなく、家族への思いや昔から受け継がれてきた伝統に気づくことができるようにした。そして、家族への感謝とともに、自分が家庭生活に関わる上での視点となるようにした。

３．実践報告

（１）題材名　おいしいね　毎日の食事(10 時間完了)

（２）題材の目標

○毎日の食生活に関心をもち、家族が喜ぶご飯の炊き方やみそ汁の作り方を追求しようとしている(関心・意欲・態度)

○栄養バランスや好み、旬等を考慮しながらみそ汁に使うだしの種類、実の組み合わせ、切り方・入れる順番を工夫し、家族が喜ぶみそ汁づくりの調理計画を立てることができる(創意工夫)

○火加減や時間に気を付けてごはんを炊いたり、だしのとりかたや実やみそを入れるタイミングに気を付けながらみそ汁を作ったりできる(技能)

○米やみそ、みそ汁の実となる野菜の栄養的な特徴、ごはんとみそ汁を基本とした伝統的な和食のよさ、ご飯とみそ汁の調理手順を理解している(知識・理解)

【資料６】　実習Ⅱの実習計画(構想)(注 3)

段階		学習活動と評価規準(☆)
習得１(導入・基礎)	毎日の食事を振り返ろう(2)	**1 どうして給食は好きなものばかりでないのか考えよう** ・なぜ人は食べるか考える。 ・五大栄養素とそのはたらきについて知る。 ・給食と好物だらけの食事メニューを比べ、赤・黄・緑の食品群に分類する。 ☆バランスよく栄養をとる大切さがわかる(知)
		2 どんな食品を食べているか調べよう ・３日間の食事調べをして、主食として何を食べているか分析する。 ・昔の食事風景から日本でよく食べられているのはご飯とみそ汁だということに気づく。 ・家庭で食べている主食やみそ汁に興味をもつ。 ☆日本の伝統食である飯とみそ汁に関心をもっている(関)

習得2(基本学習)	ふっくらおいしいご飯とこくのあるみそ汁を作ろう(6)	**3 米はどのようにご飯に変わるのかな** ・米がご飯になるためには、水と熱が必要だと気づく。 ・炊飯実験をして、米がご飯に変わる様子を観察し、記録する。 ☆炊飯について理解している(知)
		4 みそはどうして何百年も前から親しまれてきたのかな ・３種類のみそを比べ、みその種類や製造工程に興味をもったり栄養が豊富だということを知る。 ・だしの入ったみそ汁とだしの入っていないみそ汁を飲み比べ、だしの入ったみそ汁の方がこくがあると気づく。 ☆みそクイズに積極的に参加している(関)
		5 こくがあり、香りのよいみそ汁のためし調理をしよう ・示範を見てにぼしだしの取り方、火加減、みそを入れるタイミングを知る。 ・にぼしのだしやみそを入れる順番と火加減に気を付けてみそ汁を作る。 ☆にぼしの処理やみそを入れるタイミングに気をつけてみそ汁を作ることができる(技)
活用1 発展学習		**6 ご飯とみそ汁の調理計画を立てよう** ・米飯とみそ汁の調理の手順がわかる。 ・効率よくご飯とみそ汁を作ることができるように調理実習の見通しをもつ ☆調理に必要な材料の分量や調理手順がわかる(知)
		7・8 ご飯とみそ汁の調理実習をしよう ・ポイントに気をつけながら炊飯とみそ汁の調理実習をする。 ・仲間と協力しながら準備や片づけをする。 ☆米飯及びみそ汁の調理ができる(技)
活用2 発信・交流	家族のためにみそ汁を作ろう(2)	**9 家族のためにみそ汁づくりをする計画を立てよう** ・家族からインタビューしたみそ汁を作るときの工夫を発表し合う。 ・家族の好み、栄養、旬等を工夫して、家族のためのみそ汁づくりの実習計画を立てる。 ☆家族が喜ぶみそ汁を作れるように自分なりに工夫して計画を立てている(創)
評価・一般化		**10 実践報告会を開こう** ・家族のためにつくったオリジナルみそ汁のレシピを書く。 ・グループでレシピを紹介し合い、友達のレシピのよさを認める。 ・家族にメッセージを書く。 ☆家族に感謝し、家庭生活に関わろうとしている(関)

（２）実践について

①どんな食品を食べているか調べよう－和食と伝統－

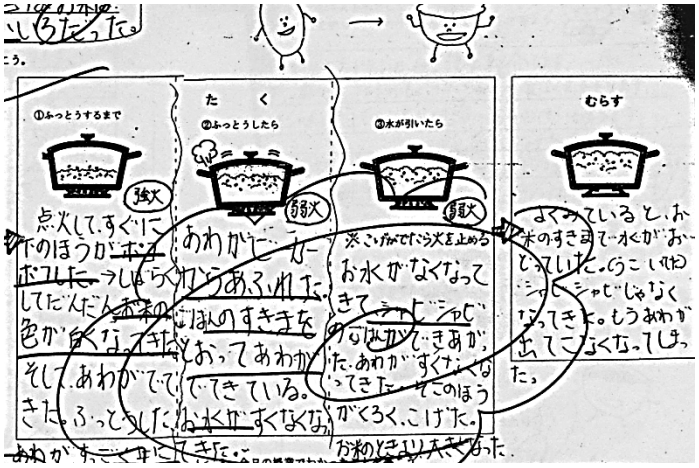
昨今の食の欧米化により和食を食べる家庭は減少している。児童に和食に関心をもたせるために、弥生時代から昭和までの食事の様子を写真で見せたり、昔、食べられていたとされている古代米に触れたりさせた。そして、家庭での食事を振り返らせ、当たり前のように食べているご飯とみそ汁は千年以上前から伝わる日本の伝統食であることに気づかせた。

②米はどのようにご飯に変わるかな

多くの家庭では炊飯器でご飯を炊いており、炊飯がどのように行われているかほとんどの児童は知らない。そこで炊飯を実感的に捉えられるようにした。

まず、米とご飯を香りや大きさ、感覚等を比較させ、米とご飯の違いは水だということに気づかせた。次に、普段の炊飯の様子を思い出させ、水以外に熱も必要だということを共有した。そして、ビーカーを使って炊飯実験を行った。ここでは、Ⓐ米の大きさ、Ⓑ水の量、Ⓒ米と水の動きの３つに着目させて、観察を行った。

【資料７】炊飯実験のワークシート



③こくがあり香りのよいみそ汁のためし調理をしよう

連携協力校は家庭科室の設備や調理器具の数、児童の人数等で大人数のグループで調理実習を行わければならない。そこで、ためし調理の場を設けて４人の少人数グループで実の入っていないみそ汁づくりを行い、みそ汁づくりのこつ(にぼしのだしのとりかたや火をつけたり消したりするタイミング、みそを入れる順番等)を身に付けさせた。

さらに、試飲の感想では児童それぞれの個性や感性が表れるような話型を取り入れたワークシートを用い

た。(下線以外が話型)

①みそ・にぼしレストランのみそ汁を紹介します。
まず、香りはみそのいい香りが体全体に広がります。
そして、味はこくて天国にいるようです。
②ザ・みそしるずレストランのみそ汁を紹介します。
まず、香りはあだやかな塩のかおりです。
そして、味はぬるくてみそ汁の花畑のようです。

④家族のためにみそ汁づくりをする計画を立てよう

各家庭の食卓に並ぶ料理は作る人の思いや工夫が込められている。本時ではみそ汁調べのインタビューを通して、家庭での料理の工夫やその家の伝統等を感じさせることにした。(資料８)

インタビューではみそ汁のみその種類、だしの種類、実についてとそれらを用いている理由を調べさせた。そして、食材を使う理由をⒶ好みⒷ健康Ⓒ伝統Ⓓ作りやすさの４種類に分類しながらグループで交流した。さらに学級全体でも紹介し合うことで、それぞれの家庭のみそ汁のよさや工夫を感じさせた。最後に、それらをもとに、家族のために作りたいみそ汁の計画を立てさせた。(資料９)

児童Ｃの家庭のみそ汁は資料８のインタビューカードで家族の伝統と好みを考慮して作られていることが明らかになった。その後のグループ交流や学級全体の交流の後、我が家のみそ汁の伝統や好みを踏まえながらも、「体にいい」という栄養面や「すぐに作れそう」という手軽さも考えながら計画を立てていることが資料４からわかる。

【資料８】児童Ｃのみそ汁インタビューカード(下線は佐々木、以下同じ)

質問項目	わかったこと	理由
みその種類	麦みそ	父と母が九州出身で麦みその味にしか慣れていないから
だし	かつおぶし	風味がよいから
みそ汁の実や組み合わせ方	とうふとわかめ、なすとたまねぎ、なめことねぎ	とうふとわかめはいつも冷蔵庫にあるから。なすと玉ねぎは体にいいし、なすがたくさんあるときに作る。なめことねぎは子どもが好きだから。
その他(家だけの特徴)	うす味	おじいちゃんの健康のためにお母さんが子どものころからうす味で育ったので、ついついうすくなってしまう

【資料９】　児童Ｃのみそ汁の調理計画

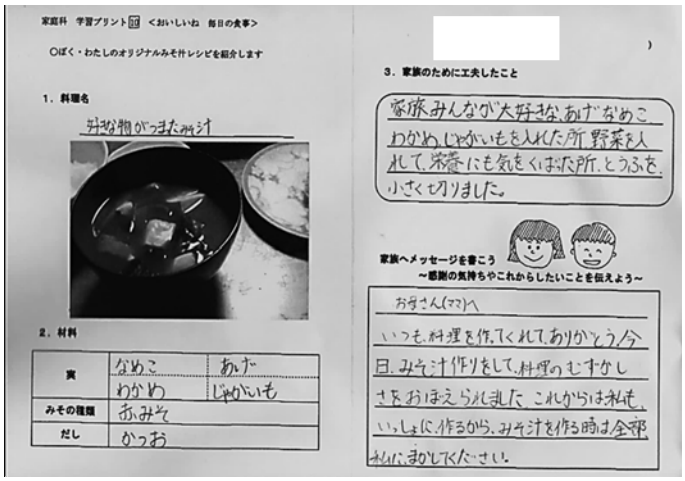
	材料	選んだ理由
みその種類	合わせみそ	おいしいし、自分で食べたことがあまりないから。
だし	かつおぶし	風味がいいし、自分の家で作るから。おいしいから。
実	ねぎ、とうふ、わかめ、たまねぎ	自分の家でよく入れられていて慣れているし、おいしいし、体にいいし、すぐに作れそうだから。

⑤実践報告会を開こう

前時に考えたみそ汁の計画表をもとに、各家庭で作ったみそ汁づくりを行い、その実践報告を行った。

まずオリジナルレシピを作成した。レシピには写真か絵を貼り、料理名・材料・家族が喜ぶための工夫を書いた。次にグループで紹介し合い仲間のレシピのよさを見つけあった。最後に「家族へのメッセージ」を書くようにした。

【資料６】オリジナルレシピ



４．成果

(1)児童の実態と教科目標に沿った実習計画の設定

本実践では家族のために食事づくりをし、家庭生活をよりよくする楽しさや喜びを味わわせることが目的だったが、そこに至るまでには、ご飯とみそ汁に関心をもたせること、みそ汁づくりの基礎・基本を身に付けていること、どのような観点で工夫すれば家族が喜ぶのか知ること等さまざまな学習過程が必要であった。最終的に目指す児童像を見据えて、一つひとつの授業で児童に身に付けさせたいことを明らかにすることの大切さを実感した。

(2)体験したことを表現し、生活への感性を高める

体験して感じた驚き、喜び、疑問、学び等を言葉にして表すことは家庭生活により関心をもったり、生活への感性を高めたりすることができる。そして、その際に視点を示すことが必要である。実験であれば何に着目すればいいのか、調理実習であればおいしく作るためのポイントを３つまとめること、試食した感想であればどのように感じたからおいしいのかというように児童に感じさせたいこと、学ばせたいことは何か明確にして児童の実態に合った言語活動を設定すること

が大切である。

(3)家庭との連携による我が家の再発見

家族にみそ汁づくりのインタビューをして、それを友だち同士で交流することで自分の家庭のみそ汁のよさを感じることができた。また、なぜその材料を使っているのか知ることにより食卓に並ぶみそ汁はおいしさや栄養、そして、代々受け継がれてきたもの等いろいろな意味があることに気づくことできたと考えることができる。さらに、家庭でのみそ汁づくりの感想では「みそ汁をつくることがこんなに大変だとは思わなかった、お母さんは毎日作っているからすごい」といった母親の尊敬を記述する児童もおり、普段は当たり前のように感じている家庭生活の見かたを変えることができたのではないかと考える。

５．課題

(1)家庭科における「習得」「活用」を明確にすること

本実践の題材であったご飯とみそ汁づくりにおいて習得・活用を踏まえた単元計画を構想したが、既習事項であった包丁の使い方や食器の洗い方等調理における基礎・基本的な技能が身に付いていない児童が何人かいた。活用力や生活に生きる力を育てるためには義務教育の中での５年間の家庭科授業を見通して、習得・活用を教師自身がよく理解しておく必要があると痛感した。そこで家庭科のみそ汁づくりの調理における習得・活用を自分なりに整理することとした(資料 10)。

(2)言葉の奥に隠された思いや背景を読みとること

家族へのインタビューで各家庭のみそ汁には作った人の思いや工夫、代々受け継がれてきた伝統等たくさんのものが込められていた。指導案上ではⒶ好みⒷ健康Ⓒ伝統Ⓓ作りやすさの４種類に分類することになっていたが、実際に授業をしてみるとその分類方法では当てはまらないものが多くあった。例えば「毎日同じものだとみんなが嫌がるから、ときどき韓国風のダシダをつくる」と発表した児童がおり私は無理やりⒶ好みに分類してしまった。だが、それは家族が毎日おいしく食事をするための工夫であって好みとは少し異なる。彼の家庭では毎日かつおぶしと昆布でだしをとっているが、時々、韓国のだしでもみそ汁を作っていることが後に分かった。毎日、手間をかけてだしをとるだけでなく味に変化をつけるためにだしを変えるという家族を思う愛情がこめられている。授業をしている時は自分自身が精一杯でそれに気づけず、授業に生かせなかった。

同じように本実践で児童や保護者の言葉の表面だけにしか目を向けられず、その言葉に込められた思いや

【資料 10】小・中学校で身に付けるべき調理の習得・活用（注 4）

	習得 （基礎・基本の知識と技能）	活用（思考力・判断力・表現力と課題解決力）	探究 （主体的な課題解決）
小学校	１身支度や調理場の環境を整えること ２こんろや用具、食器の安全で衛生的な取扱い ３材料や目的に合った洗い方 ４計量器具で正しく計量すること ５包丁で安全に切る・皮をむく、形や大きさを整える等、目的に合った切り方 ６食塩、しょうゆ等塩味による味付け ７分量や色どり、食べやすさを考慮した盛り付け ８食器の位置を配慮した配膳 ９衛生的な後片付け(食器の洗い方や拭き方、机や流しのそうじの仕方)	１ゆでる調理 ２いためる調理 ３米飯、みそ汁づくり ４一食分の食事づくり (米、野菜、いも類、卵等を用いた料理)	願いを込めて調理をすること (おいしく作るために、家族のために、環境に配慮して…等)
中学校	１食品に合った洗い方、排水に考慮した洗い方 ２食べられない部分を排除する、食べやすさ、加熱しやすさ、調味料のしみこみやすさ、見た目の美しさを考えながら切ること ３煮る、焼く、炒める等加熱調理 ４砂糖、塩、酢、みそ、醤油等調理に合った味付け ５料理の様式に応じた盛り付けや配膳	一日に必要な栄養素を考慮した献立を踏まえ、生徒の実態に合う日常食の調理 (魚、肉、野菜を中心とした料理)	食生活の課題を解決するために調理すること (バランスのよく、地産地消を目指して、手早く作れる朝食…等)

背景を汲み取ることができないことが多々あった。それができれば、深い家族の温かさに児童がより気づくことができたはずである。そして、これは授業だけでなく、児童理解にも繋がる大切なスキルである。この能力を身に付けることを今後の課題としたい。

Ⅶ　教師力向上実習Ⅰ・Ⅱを通した今後の展望

１．全ての能力・学力の基盤となる言語力の育成を

次年度以降の教育課程を考慮すると、各教科・領域の専門的な知識や技能の「習得」、体験的な活動だけでなく豊かな言語力を用いて思考･判断する能力(活用型能力・学力)を体得させ、主体的に課題解決しながら生活を探究、創造していく児童の育成が重要である。

家庭科学習において大切なことは「生活をよりよく創る能力と実践的な態度」の育成である。家庭科はしばしば体験的な活動が指導の中心となり活動を振り返ること等が不足しているため、児童の家庭生活に学びが生かされない面が多い。本実践研究では家族の一員として生活に関わる楽しさや喜びを感じさせるため３つの観点で言語活動を取り入れた。１つ目は家族に対する思いや生活への感性等を高めるための「内面の言語化」、２つ目は言語活動から判断し課題解決・学びの定着を図るための「思考の言語化」の工夫、３つ目は自らの実践を振り返り新たな課題を見つけたり、仲間から認められることで家庭生活に関わる意欲を高めたりするための「学びの交流・協働的な学び」である。

２．「自立・協働・創造」的な能力と系統性・汎用性

家庭科学習における自己と家庭、家族と社会のつながりの重視、「持続可能な社会」への参画への観点を活かすために、今、改めて何が必要か。主体的な課題解決能力、自己を見つめ客観的に捉える「メタ認知」、他者とよりよく関わる協働的なコミュニケーション力、他者や環境を大切にする感受性等、いわば多くの「汎用的能力」が必要であると私は考えている。

本実践研究では家庭科学習だけでなく道徳・学活においてもこれらの能力の育成を目指したが、特に「メタ認知」の能力を高めるためには他教科と横断しながら発達段階に応じて系統性・汎用性に留意した学習過程論、授業開発等の再構築が必要であると思われる。

今後とも、児童一人ひとりが将来、生活的･社会的・精神的等様々な面で自立し、多様な人々と協働しながら生活をよりよく創造し、温かな暮らしを送ることができるような指導を目指していきたい。

注記

１.『社会の変化に対応する資質や能力を育成する教育課程編成の基本原理(教育課程の編成に関する基礎的研究(報告書 5)』国立教育政策研究所(2013)、『資質や能力の包括的育成に向けた教育課程の基準の原理(報告書 7)』同(2014)、『第 2 期教育振興基本計画』(中央教育審議会・2013)等。

２．北島貞一『自己有用感』田研出版(1999)、「生徒指導提要」文部科学省(2010)、『高めよう！自己有用感　栃木の児童の現状と指導の在り方』栃木県教育総合センター(2012)等。

３．佐藤洋一『国語科「習得・活用型学力」の開発と授業モデル４　伝記・ノンフィクション編』明治図書(2011)をもとに家庭科における学習過程論として佐々木が構成したものである。

４．学習指導要領をもとに佐々木が再構成を行った。

【主な参考文献】

１．文部科学省、国立教育政策研究所関係等

『小・中学校学習指導要領解説 家庭科編』文部科学省(2008)、『高等学校学習指導要領解説 家庭科編』同(2010)、『言語活動の充実に関する指導事例集 小学校版』同(2012)、『評価規準の作成、評価方法等の工夫改善のための参考資料 小学校家庭』国立教育政策研究所教育課程研究センター(2010)、『初等中等教育における教育課程の基準等の在り方について』中央教育審議会(2014)、『初等教育資料』東洋館出版社(2013, 7 月号、12 月号) 等。

２．実習校関係『平成 26 年度　学校経営案』(Ａ市立Ｂ小学校)。

３．実践関係

桜井純子『新学習指導要領を読み解くよくわかる小学校家庭科学習指導要領』開隆堂、野﨑惠津子・稲田百合『新任教師のしごと 家庭科授業の基礎基本』教育技術 MOOK、川上文代『ひと目でわかる料理の教科書きほん編』新星出版社、佐藤洋一「正確に聞くポイントを知り、メモする力を身につけよう」、同(講演資料)「なぜ国語を学ぶのか　勉強が好きになる５つの力」等。

【付記】　連携協力校の多くの先生方からご多忙の中、温かいご指導やご助言、励ましの言葉をいただきました。校長先生や指導の先生をはじめ、お世話になった全ての先生方に感謝申し上げます。最後になりますが、学校サポーターや実習Ⅰ・Ⅱ、修了報告書作成にあたり継続的に大変親身になって指導して頂いた佐藤洋一先生、教師力向上実習Ⅲで指導して頂いた山田淳夫先生、フィールド実習で指導して頂いた志水廣先生、ご指導・ご助言を頂いた教職大学院の全ての先生方に感謝申し上げます。